

**"Ice Before the Equinoctial Heats"**  
 —学徒メルヴィル—

星野 勝利

I believe each individual passes through all three.  
 The boy is a Greek; the youth, romantic; the adult,  
 reflective.

--Emerson, "The American Scholar" (1837)

はじめに

「私の人生は 25 歳から始まります」(From my twenty-fifth year I date my life)<sup>1</sup>。先輩作家ホーソーンにメルヴィルはこう書き送った。『白鯨』(*Moby-Dick*, 1851)の完成を間近にした 1851 年の夏、31 歳の時である。人生の出発点としてメルヴィルは二十代の半ばの時期を考えた。処女作『タイピー』(*Typee*, 1846)の執筆を始めた時期である。メルヴィルによると、これ以前の自分はまだ芽を出していない「種子」(seeds)のようなもので、作家を意識して作品を書き始めた 25 歳の頃から、「三週間もすれば必ず新しい芽吹きがあった」(Three weeks have scarcely passed...that I have not unfolded within myself) という。

なるほどメルヴィルは 25 歳の時から作家としての「人生」を始める。しかし、それ以前のメルヴィルに「人生」がなかったわけではない。少なくとも「種子」としてのそれはあったはずである。その「種子」とは、具体的にどのようなものであったのか。またそれは、それをとりまく環境とどのように関わり、さらに作家としての「芽吹き」と、どのような関連を持つものであったのか。

## 1 彼岸と此岸、1837 年

メルヴィル (Herman Melville, 1819-91) が生きた時代、とりわけ「種子」として生きた時代を知るために、特定の年を取り上げてみる。たとえばメルヴィルが 18 歳になった年、1837 年。

この年イギリスでは、ヴィクトリア女王が即位する。歴史の節目となる一つの出来事である。ウィリアム 4 世の後を受けて即位したこの女王の治世に、かつてアメリカの宗主国であったイギリスは、大英帝国として大きな繁栄を謳歌することになる。その節目となる即位の年が、メルヴィル 18 歳のこの年である。

この頃イギリスの文壇では、カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) やディケ

ンズ(Charles Dickens, 1812-70) の活躍が目立っている。いずれもアメリカと何らかの関わりを持つことになる人物である。選挙法改正、救貧法、オックスフォード運動など、政治的、宗教的問題で社会が激しく揺れる中、二人は活発な活動を展開する。すでに『衣装の哲学』(*Sartor Resartus*, 1833) を発表していたカーライルは、その年にアメリカの青年エマソンの訪問を受けているが、女王即位のこの年、『フランス革命史』(*The French Revolution*) を刊行する。後の『フレデリック大王伝』(*The History of Friedrich II of Prussia, Called the Frederick the Great*, 1858) と並び、高く評価されることになる歴史書である。

一方ディケンズはこの年、雑誌に『オリヴァー・トウィスト』(*Oliver Twist*) の連載を始める。すでに前年に『ボズのスケッチ集』(*Sketches by "Boz"*) と『ピックウィック・ペーパーズ』(*The Pickwick Papers*) を刊行していたディケンズは、小説家としての人生を歩き始めていた。この頃から以後約30年間、ロンドンの大衆社会を中心に、ヴィクトリア朝イギリス社会の内情を小説を通して鋭く暴いていくことになる。その間、アメリカを訪れ、『アメリカ覚え書き』(*American Notes*, 1842) を著すという経験も持つことになる。

大西洋を挟んだアメリカでも、1837年は歴史の一つの節目である。ジャクソニアン・デモクラシーの仕掛け人、合衆国第7代大統領ジャクソン(Andrew Jackson, 1767-1845) が、新たに選出された大統領ヴァン・ビューレン(Martin Van Buren, 1782-1862) と交替するのは、イギリスで女王が即位したこの年である。

この頃アメリカ文学の中心地は、ニューヨークである。1837年という一つの時間と、ニューヨークという一つの場に注目すると、多くの文学者の顔が浮かんでくる。月刊文芸誌『ニッカーボッカー』(*The Knickerbocker*) に拠ったアーヴィング(Washington Irving) やブライアント(John Bryant) はもとより、当時イギリスから帰国してアメリカの民主主義への批判的姿勢を強めていたクーパー(James Fenimore Cooper) なども、そのリストに載る。しかし、後の文学的活動との関連で眺めると、ポー(Edgar Allan Poe, 1809-49) やホイットマン(Walt Whitman, 1819-91) も加えることも可能だろう。1831年に陸軍士官学校を退学したポーは、その後雑誌編集等の仕事の傍ら、貧窮の生活の中で詩や短編の創作に従事する。そのポーが、若い妻と義母とともに、リッチモンドからジャーナリズムの中心地ニューヨークへと向かったのは、やはり1837年のことである。

この頃ホイットマンは、ニューヨークの隣のロングアイランドで、10代後半の若者として多様な生活を送っている。事務員、印刷工、植字工などの仕事を経験した後、ポーがニューヨークに生活の場を移したちょうどそのころ頃、まだ十代の身でありながら、短期間教職にも従事する。教師の職は、ホイットマンにとつ

ては必ずしも望むものではなかった。しかし、他の職を探すのもまた困難な時代であった。

ホイットマンの伝記に見られる次のような一節は、この困難さが、当時のアメリカの経済状況と深く関わるものであったことを示している。大統領が交替したこの年、まだ若い共和国アメリカは、建国以来最大の経済的危機とも言える恐慌を経験する。この恐慌は、ジャクソン大統領の政策や農業生産、あるいはかつての宗主国イギリスとの関係にも起因するような、複合的なものであった。しかし、この厳しい状況が、1837年という節目の年を特徴づけるアメリカの一つの現実であったことも確かである。

It is likely that he [Whitman] tried to secure other employment, but by this time the nation was in the grip of the worst economic depression in its history. Land speculation and Jackson's financial policies had contributed to the collapse, but there were other causes, such as crop failures in this country and bankruptcies of firms in England that had invested in American land and industry. (Allen, 31)

## 2 自己に拍車を

視線をニューヨークから北に向け、ボストン界限に焦点を合わせると、この時期を代表する人物として、もう一人の姿が浮かび出る。エマソン(Ralph Waldo Emerson, 1803-82)である。ハーバード大学の学生として神学部に進んだエマソンは、その後聖職の道を歩み始める。しかし、教会制度への疑念から牧師の職を辞し、女王即位の年の4年前の1833年、イギリスに向かう。そのイギリスでコールリッジやワーズワースを訪ねたエマソンは、『衣装の哲学』を著したばかりのキャリアルとも親しく話をする機会を持つ。

それから4年後、大統領が交替し、恐慌が襲った年、エマソンはすでにボストンでは大きな存在である。すでに前年にエッセイ集『自然』(*Nature*)を出版したエマソンは、この年、詩人としても後世に名を残すことになる。独立戦争の史跡に建てられた民兵像を記念して、独立記念のその日に、詩「コンコード賛歌」("The Concord Hymn")を発表する。独立のために戦った「武器をとった農民たち」(the embattled farmers) に対し、新生共和国に生きる後世の者として、深い敬意と誇りを表すものである。

By the rude bridge that arched the flood,  
Their flag to April's breeze unfurled,

Here once the embattled farmers stood  
And fired the shot heard round the world.<sup>2</sup>

この独立記念日から一ヶ月後、エマソンは母校ハーバード大学で講演する。男子学生組織ファイ・ベータ・カッパの招待によるものである。現在までのアメリカの学者の歩みを「長い徒弟時代」(long apprenticeship)と見るエマソンは、他国の学問への「依存」(dependence)からの脱却を聴衆に強く求める。目指すべきは「考える人間」(Man Thinking)であり、そのために必要なのは「自己信頼」(self-reliance)である。200人を越える聴衆を前に、「アメリカの学者」("The American Scholar")と題されたこの講演を、エマソンは次のように締めくくる。

We will walk on our feet; we will work with our own hands; we will speak our own minds. The study of letters shall be no longer a name for pity, for doubt, and for sensual indulgence. The dread of man and the love of man shall be a wall of defence and a wreath of joy around all. A nation of men will for the first time exist, because each believes himself inspired by the Divine Soul which also inspires all men.<sup>3</sup>

エマソンがこのような活動をしている頃、ボストン近郊の町セイレムでは、もう一人の人物が文筆修行の生活を送っていた。ホーソーン(Nathaniel Hawthorne, 1804-64)である。実家での修行の生活は静かなものであった。しかし孤独に満ちたものというわけでもなかった。匿名の短編を地元の新聞にしばしば投稿していたホーソーンは、その一方で、ニューハンプシャーやバーモントなど、ニューイングランド地方を中心に、地方への旅もしばしば楽しんでいる。海を越えてイギリスに渡り、当時の知識人と直接交わったエマソンに比べれば、この頃のホーソーンの行動の範囲は確かに限定されたものではある。しかし、時にはカナダやナイアガラあるいはデトロイトなど、遠方まで馬車の旅を楽しむ若者ではあった。

1837年はホーソーンにとっても節目になる年である。この年ホーソーンは短編集『トワイス・トールド・テイルズ』(*Twice-Told Tales*)を、はじめて実名で出版する。一個の作家としてのホーソーンの存在が、これを契機に世間的にはじめて認知される。同時に、それまで匿名性の背後に隠されていた作者としての内質が、これを契機に白日の下に晒されることにもなる。

この出版の直後、ホーソーンはロングフェロー(Henry Wadsworth Longfellow)に手紙を送っている。大学時代の同級生である。在学中の二人は必ずしも親しい仲ではなかった。しかし、ヨーロッパに留学し、今ではハーバードの教壇に立つこ

の友に対し、ホーソーンは自分の過去の生活とこれからの展望に触れて、次のように記している。手紙の内容が、やがてホーソーンがメルヴィルから受け取ることになる手紙のそれと類似しているのは、興味深い。メルヴィルは「自分の人生は25歳の時から始まります」と記したが、ホーソーンは次のように書き送る。

For the last ten years, I have not lived, but only dreamed about living. It may be true that there have been some unsubstantial pleasures here in the shade, which I should have missed in the sunshine; but you cannot conceive how utterly devoid of satisfaction all my retrospects are. I have laid up no treasure of pleasant remembrances, against old age; but there is some comfort in thinking that my future years can hardly fail to be more varied, and therefore more tolerable, than the past. (Turner, 89)

メルヴィルと同様に、ホーソーンもまた過去の生活に対して否定的である。過去の自分は夢の中にいるような存在で、「十分には生きてこなかった」(I have not lived)のである。とはいえ、未来について語るホーソーンのことばには、やはり樂觀的な響きがある。来るべき新しい人生は、「より変化に富み」(more varied)「堪えうるもの」(more tolerable)である。このあとホーソーンは、自分はこれから「ふくろうの巣」(owl's nest)を後にしてニューイングランドの旅に出るつもりだ、と記している。「ふくろうの巣」から出立して新しい地平を目指すこの姿勢には、ハーバードの若者たちを前にして語るエマソンのそれが重なり合う。ホーソーンはさらに、新しい自分に「鋭い拍車」(sharp spur)を掛けたいとも書き足す。

I have now, or soon shall have, *one sharp spur to exertion*, which I lacked at an earlier period; for I see little prospect but that I must scribble for a living. (Ibid. my italics)

エマソンやホーソーンのことばは、それぞれ一個の人間の個別のことばでしかない。しかしことばには、そのことばが発せられる時代や場所の状況がしばしば反映される。「自己信頼」や「拍車」に触れるエマソンやホーソーンのことばに、この時期のボストンを中心とするニューイングランドの精神的風土を垣間みることも可能である。その場合その風土とは、独立への可能性と未来への展望を可能にしてくれる、開かれた、明るいものであったと言うべきだろう。

### 3 学びと教え

マサチューセッツ州の西部にパークシャー地方と呼ばれる地域がある。ニュー

ヨーク州と隣接する風光明媚なところである。隣接するニューヨーク州の東部では、ハドソン川が北から南へと、川下の大都会ニューヨークに向かって流れていく。アメリカ経済の中心地ニューヨークと川を通して結ばれた交通の要衝に、州都オールバニーの町がある。

エマソンやホーソーンが「自己信頼」や「拍車」について触れていた頃、メルヴィルは、二つの州をまたぐこの地域で十代後半の一時期を過ごしている。経済と文化の中心地ともいべきニューヨークとボストンを、それぞれ南と東に遠く控えたような地域である。一人の人間の成長過程において、10代後半の果たす役割は大きい。少年から青年へと移行するこの時期に、人はしばしば人間としての基本的骨格を形成する。大きな二つの世界を遠くに望む地域で過ごされたこの時期のメルヴィルの生活のありようは、この意味で注目される。

この時期のメルヴィルを経済状況を抜きにして語ることは難しい。メルヴィルが生まれたのは1819年である。毛皮商を営む家庭の八人兄弟の次男としてニューヨークに生まれたが、現実の家庭環境は、経済的に恵まれたものではなかった。経営の破綻した父親が発狂状態で他界した後、代わって跡を継いだ兄ガンズボートの会社も、やがて倒産の憂き目に合う。1837年の不況のあおりである。兄が病魔に襲われた後は、家族扶養の役割が十代のメルヴィルの肩にも重くのしかかることになる。これがこの時期のメルヴィルを取り巻く生活環境である。

共時性という尺度でエマソン、ホーソーン、そしてメルヴィルを眺めると、目立つのはこの経済的環境の落差である。落差で注目されるのは、教育の問題である。エマソンとホーソーンは、ともに大学教育を十分に受ける身であった。ホーソーンはボードン・カレッジ(Bowdoin College)に学び、エマソンはハーバードで学んでいる。しかしメルヴィルにとって、このような大学は縁のない世界であった。それどころか、1837年、まだ18歳のメルヴィルは、ホイットマンと同じように、数カ月間教師の仕事に従事することになる。学ぶ側に立っても不思議でない年齢でありながら、学びを授ける側に立つのである。

メルヴィルは、知られる限り、生涯に次の四つの学校で学んでいる。

New-York Male High School (1825年、6歳で入学)

Albany Academy (1830年、11歳で入学)

Albany Classical School (1835年、16歳で入学)

Lansingburgh Academy (1938年、19歳で入学) (Parker, 42-137)

ランシンバーク・アカデミーは、エリー運河の技師の職を得ることを目的に短期

間学んだ学校である。いわゆる大学ではないが、メルヴィルが体験した制度としての学校は、これがすべてである。

一方メルヴィルは、次の三つの学校で教職を経験したことが知られている。

Sikes District School (1837年、パークシャー地方ピッツフィールド南方の村)  
 Greenbush & Shordack Academy (1839年、オールバニーから13マイル程の村)  
 a school at Brunswick School District (1839年、校名不詳、ブランスピック市内)  
 (Parker, 117-71)

メルヴィルの教職経験は、いずれも短期間の契約のものである。給料も満足のゆくものではなかった。未払いのまま仕事を諦めねばならなかったこともあったほどである。その上、意のままにならない子どもたちや、その合わない同僚がいたことも知られている。とはいえ、この職業は、若いメルヴィルにとってはそれなりに有益なものであったに相違ない。18歳の教師メルヴィルは、自分の叔父への手紙で、次のようなことを書き送っている。

But now, having become somewhat acquainted with the routine of business,—having established a systim [sic] in my mode of instruction,—and being familiar with the charactars [sic] & dispositions of my schollars [sic] : in short, having brought my school under a proper organization—a few intervals of time are afforded me, which I improve by occasional writing [sic] & reading. (Parker, 119)

誤字の目立つ手紙である。しかし、仕事の空き時間を「活用」(improve)して「書き物や読書」(writing & reading)で過ごす教師メルヴィルの姿には、教師としての姿よりも、むしろ若い学徒としての姿が浮かび出る。実際メルヴィルにとって、それまで学んだ学校は必ずしも満足を与えてくれるものではなかった。兄と通ったオールバニー学院(Albany Academy)は、父の死のため12歳にして中途退学せざるを得なかったし、しかもその後約3年間、まだ十代前半のメルヴィルは、オールバニーの州立銀行で行員の仕事に従事することになる。この学校には、オールバニー古典語学校(Albany Classical School)での短期間の在籍を挟んで、17歳の時復学することになるが、それもつかの間、上記の教職に就くことになる。後にメルヴィルはランシンバーク・アカデミー(Lansingburgh Academy)で測量や土木工学を学ぶことになるが、エリー運河での職を得ることを目的に学んだこの学校も、望む仕事を保証してくれるものではなかった。

このような背景と重ね合わせると、メルヴィルの教師体験は、むしろ学徒体験と言ってもよいものであっただろう。空き時間に机に向かう若い教師メルヴィルの姿は、さながら学習機に向かう生徒のそれである。この教師の姿は、ハーバードのエリート学生を前に「アメリカの学者」について熱を込めて講演する講師エマソンのそれとは、かなり異なるものである。

メルヴィルの『白鯨』は、このような学校体験、とりわけ教職体験を彷彿とさせる内容を含んでいる。物語そのものは、「自分のことはイシュメールと呼んで欲しい」(Call me Ishmael) ということばではじまる。しかしその前に、実は読者の前に姿を見せる人物たちがいる。学校と深く関わる人物、すなわち教師であり、司書である。それも、単なる教師や司書ではなく、「助教師」(usher)であり、「司書助手見習い」(sub-sub-librarian)である。イシュメールに「語源部」(Etymology)を提供してくれたのは、「服も心も身体も頭脳もぼろぼろ」(threadbare in coat, heart, body, and brain)だったという「助教師」である。また「文献部」(Extracts)を提供してくれたのは、「見込みも血の気もないやつ」(hopeless, sallow tribe)としての「司書助手見習い」である。

生徒にからかわれるダメ教師というイメージは、メルヴィルが学校教師を体験していた頃、一般的にかなり流布していたという指摘がある。<sup>4</sup>『白鯨』の冒頭で提示されるのは、このような一種のダメ教師の世界である。学校や図書館という知的な空間に生きる、しがない人物たちである。しかし、揶揄と憐憫がない交ぜになったようなことばから浮かび出るのは、むしろメルヴィル自身の若いときの姿ではあるまいか。生活に駆りたてられながら、教えの場で、寸暇を惜しんで自ら学ぶ、しがない青年(少年)教師メルヴィルの姿である。

この教師メルヴィルをとりまく世界は、エマソンやホーソーンのそれとはかなり異なる。この違いをあえて図式化するならば、知的に洗練されたボストン境界の世界と、経済恐慌の波に洗われるハドソン川流域の世界という、対照的な二つの世界である。文化と経済の対照と言い換えてもよい。前者のそれが、明るい未来を約束するものとすれば、もちろん後者のそれは、「見込みのない」(hopeless)「ぼろぼろ」(threadbare)の未来を予想させるものであっただろう。

#### 4 春を待つ氷

「捕鯨船が、私のイエール大学であり、ハーバードである」(a whale ship is my Yale College and my Harvard)。この時期から約十年後、メルヴィルは『白鯨』(24章)の中でこの言葉を記す。記すのはイシュメールである。陸を棄てて海に出たこの若者にとって、大学とはすなわち捕鯨船であった。捕鯨船が大学になりうるので

あれば、この若者にとって大学に相当するものは、おそらく他にも見あたることになるだろう。

1836年9月、17歳のメルヴィルは5年前に一度退学していたオールバニー・アカデミーに復学する。ラテン語コースに籍を置き、学徒として生活を始めたメルヴィルは、青年向上協会(Young Men's Association of Mutual Improvement)に登録し、シセロニアン・ディベイティング・クラブ(the Ciceronian Debating Club)の会員となる。会の消滅後は、新たな会フィロ・ロゴス・ソサイアティ(Philo Logos Society)に身を置き、作文と雄弁術と討論に若いエネルギーを注ぐ。教職をはじめて経験するのは、この学徒体験のすぐ後のことである。

この頃地元の新聞に、メルヴィルと関わると思われる投書が掲載される。投書の内容は学徒メルヴィルの生活の一端を示してくれる。雄弁会を牛耳る鼻持ちならない人物としてメルヴィルを激しく批判したと思われる投書が、地元の新聞マイクロスコープ(*Microscope*)に掲載されたのである。

Mr. EDITOR:--Your paper abundantly testifies to the fact, that there is in all associations, pestiferous animals of a two-legged kind; who have crept in unawares, and scattered the seeds of dissolution in the once fair and flourishing institutions....Such an animal is the P\*\*\*oL\*\*\*s Society cursed with. He is there known by the title of Ciceronian Baboon; and his personal appearance fully established the correctness of the title. He is also known as *dignitatus melvum*.... (Parker, 111)

投書者が「キケロ的ヒヒ」(Ciceronian Baboon)と呼ぶ「疫病やみの動物」(pestiferous animal)が、どうやらメルヴィルと関わりがあるらしいことは、「ディグニタトゥス・メルブム」(*dignitatus melvum*)という思わせぶりなことばに感知される。同一人物からの別の投書は、この人物とメルヴィルとの関わりをさらに明確に示唆する。

*Hermanus Melvillian*, a moral Ethiopian, whose conscience qualms not in view of the most atrocious[sic] guilt; whose brazen cheek never tinges with the blush of shame, whose moral principles, and sensibilities, have been destroyed by the corruption of his own blac[k] and bloodless heart. With regard to his billingsgate effusion in the *Microscope*, I as heartily repel its infamous allegations, as I despise the character, and detest the principles of its infamous author. (Parker, 123, my italics)

「ヘルマヌス・メルヴィリアン」(Hermanus Melvillian)という一見ラテン語風のことばは、「ハーマン・メルヴィル」という名前を容易に想起させる。投書者によると、この人物は、「エチオピア人のようなモラル」(a moral Ethiopian)と「黒々とした血の気のない腐敗した心」(the corruption of his own black and bloodless heart)を持ち、「罵詈雑言のばらまき」(billingsgate effusion)をする人物である。いかにも過激で無礼なことばである。この無礼な投書に対しては、批判される側からもすぐさま反論の手紙が送られる。反論する側の手紙も、過激さでは少しも負けてはいない。自分を批判した投書者の名前(Van Loon)を十分に意識しつつ、「ヘルマヌス・メルヴィリアン」はこう反撃する。

In the van of these notable worthies stands pre-eminent, that silly and brainless loon who composed the article in your last week's paper, denying the existence of the Philo Logos Society, the legality of its recent election, and its alleged possession of a room in a Stanwix Hall.

I have only to remark in relation to this interesting production, that it is not more inelegant in style than wanting in truth and variety. It is a complete tissue of infamous fabrications, and is as destitute of a single fact as is the author of the parts. I refrain from enlarging upon what probable motives induced the writer to the publication of his miserable effusion. (Ibid.)

「ヘルマヌス・メルヴィリアン」によれば、自分を糾弾する相手は「愚鈍で無能な気遣い」(silly and brainless loon)である。「真実と柔軟さ」(truth and variety)に欠けるその文章は、「やば」(inelegant)である。「一片の事実」(single fact)も含まないその中身は、「恥辱的な偽造物の完璧な寄せ集め」(a complete tissue of infamous fabrications)である。つまるところ、卑劣な手紙を送った行為は「悔めな心情の大公開」(the publication of his miserable effusion)以外の何ものでもない。

このような中傷合戦が、田舎町の新聞紙上で何度か繰り返される。しかしこの合戦は、実は真面目なものではなかった。編集者から場を提供された若者が、自分たちのサークルである雄弁会の活動をめぐり、お互いの了解の上で色を付けて投書しあったというのが真相であるらしい。編集者による一種の「やらせ」である。とはいえ、雄弁術に関心を持つ若者たちにとって、新聞というメディアを通して自己を表現する機会は、たとえ遊戯的なものであったとしても、貴重なものであったに違いない。学徒の行為として眺めるならば、投書も一種の学びの行為であったはずである。

中傷合戦が一段落した年の翌年（1839年）、メルヴィルの書き物が再び新聞紙上に現れる。「書き物机の断片」("Fragments from a Writing Desk")と題されたエッセイ風の作品（以下「断片」）が、地元ランシンバーグの新聞に二度にわたって掲載される。

後にメルヴィルは二部構造を持つ作品(diptych)をいくつか発表する。たとえば「独身者の楽園と乙女の地獄」(*The Paradise of Bachelors and The Tartarus of Maids*, 1855)などである。異なる内容を持つ二つの作品が、合わせて一個の作品となる構造を持つものである。地元紙に掲載されたこの作品も、このような構造を持つ。「その1」(No.1)と「その2」(No.2)という二つの「断片」(Fragments)が、一つの作品を構成しているのである。この意味でこの「断片」は、後の作家メルヴィルの萌芽となるものでもある。

萌芽的なこの作品には、顕著な特徴がいくつかある。一つは、非難合戦の文章にもみられたような過剰な表現である。とりわけ、比喩表現の過剰さである。

「断片」の「その1」は、「L.A.V.」という署名を持つ匿名の若者が、敬愛する「M.」なる人物に宛てた手紙である。男らしさに目覚めた自分の近況と、村に住む美しい三人の乙女についての感想を伝えるものである。「その2」は、自分宛の誘いの手紙を携えた案内人に誘われて、森の中へでかけた自分が、そこで美しい乙女に出会うものの、その乙女が聾啞者であることを知り、愕然として逃げ帰る、というものである。エッセイ風の内容と中世ロマンスを想起させる半ば幻想的な物語である。これが、ギリシャ神話をはじめとする過剰な比喩表現で描出される。

手紙の書き手(L.A.V.)によれば、男らしさに目覚めた自分は「フェイディアスのジュピター」(the Phidian Jupiter)あるいは「アポロ」(Appollo)のような存在である。「美の女神」(Graces)というべき三人の美女は、それぞれ「ドーリア式、イオニア式、コリント式」(the Doric, the Ionic, the Corinthian)の特徴を備えている。導かれて訪れた森の中は「森の神の凱旋の宴」(the triumphal feasts of the sylvan god)の世界であり、そこで訪ねた家の内部は「アラビアンナイト」(Arabian Nights)のような「東方の栄華」(Eastern splendour)の世界である。そこに住む少女は、「セメレー」(Semele)や「プシケ」(Psyche)や「ヴィーナス」(Venus)などの「アルカディアの美女の絵」(Arcadian beauty pictures)に囲まれ、その目はさながら「アンダルシアの人」(Andalusian)のそれである。

いかにも通俗的な比喩の羅列である。これと平行して目立つのが、文中にしばしば現れる特異なことばと、引用や言及の過剰さである。フランス語の「恋文」(billet-doux)やイタリア語の「恋人」(inamorata)のようなことばとともに、「神

かけて！」(By the halidome!)「確かに」(Certes)のように、見慣れない古いことばが現れるのも、この作品の特徴である。その上、バートンやパイロンやコールリッジやチェスタトン等、よく知られた人物の名前が自在に言及される。更には、ハムレットのことば("my mind's eye, Horatio")やパークのことば("The days of chivalry are over!")も引用される。

このような「断片」を、習作的な若書きとして無視することはたやすい。実際この「断片」は、完成した一個の作品として取り上げられることは、現在でもほとんどない。何よりも、これが地元紙に掲載された当時、「その1」は別の新聞にも転載されたという記録がある。しかし、「その2」が転載されたという記録は残されていない。当時の新聞の編集者にとっても、おそらくこの「断片」は、完成した一個の作品としては十分な魅力に欠けるものであったのだろう。

しかし、たとえ弱点が露出した書き物であるとはいえ、後のメルヴィルの作家としての人生を思うとき、注目したい点の一つがある。次の文に見られるような「私」(L.A.V.)の姿である。

And how do you imagine that I rid myself of this annoying hindrance? Why, truly, by coming to the conclusion that in *this pretty corpus of mine* was lodged every manly grace: that my limbs were modeled in the symmetry of the Phidian Jupiter; my countenance radiant with the beams of wit and intelligence, and my whole person, the envy of the beau, the idol of the women and the admiration of the tailor. (my italics)<sup>5</sup>

後にメルヴィルは二部構造の作品の中で、対照的な二つの世界を組み合わせる。「独身者の樂園と乙女の地獄」で語られるロンドンの独身者たちの歓楽の世界と、ニューイングランドの製紙工場の乙女たちの悲惨な世界などである。「断片」もまた対照的な世界を合わせ持つ。その一つが、「私」の姿である。「その1」の「私」は、生来の控えめさをようやく克服し、過剰なまでの自己満足に目覚めた若々しい男性である。「美しき我がからだ」(this pretty corpus of mine)ということばは、その見事な自己規定に他ならない。それに引き替え、「その2」の「私」は、現実を前にして驚きと失望に襲われる対照的な「私」である。夢を失った若者の絶望の姿といってもよい。対照的な二つの世界を合わせ持つこの「私」に、作者である青年メルヴィルの姿を見てとることは、それほど困難なことではない。

美しい少女の目を眺めた時、この「私」は、自分の心が、さながら「春の陽射しを受ける氷」(ice before the equinoctial heats)のように融けていくのを感じた。だが、この陽射しは、「私」にとっては、実は裏切りの陽射しでしかなかった。少女

の現実を前にして、「春」の訪れは、幻想でしかなかったのである。

## 5 むすび

イギリスでヴィクトリア女王が即位し、アメリカで大統領が交替し、ニューヨークでポーやホイットマンが生活し、ボストン界隈でエマソンやホーソーンが未来に向かって歩き始めていた頃、メルヴィルは、ハドソン川流域の田舎町で苦しい生活に追われる身であった。ニューヨークとボストンという経済と文化の中心地を遠くに望む一種の辺境の地で、学徒として学び、教職に就き、合間に書を読み、文を書き、投稿するという、一人の若者であった。

その時期に書かれたものを、未熟さの目立つ習作的なものとして無視することは容易である。なるほど投書の文章は、洗練されたものとはいいがたい。「断片」も、青年特有の気取りと銜いが、あまりにも露骨に見られる書き物となっている。とはいえ、後のメルヴィルの作品が、詩的な文体と多彩な比喩、そして豊かな情報を内包する特異なものであることを思うと、未熟さを発散させたロマンティックな文章も、その萌芽となるものとして、見過ごすことはできない。

「断片」が掲載されてから一ヶ月後、メルヴィルはリヴァプールに向かう商船に乗り込む。アメリカが恐慌に襲われた年の翌々年、1839年6月のことである。家計支援を迫られる中で海に出た青年メルヴィルの胸中は、さしずめ「憂鬱を追い払う」(driving off the spleen)のために海に出ると語った『白鯨』(1章)の語り手イシュメイルのそれと重なるものであったろう。「春の陽射し」を待つ「氷」のようなものであったといってもよいかもしい。しかしその歩みは、後の作家メルヴィルにとっては、「種子」から「芽吹き」へと向かう確実な一歩であったに違いない。

以後メルヴィルは、捕鯨船に乗り込み、太平洋を放浪し、ホーソーンと交わり、エマソンについて語り、イギリスを再訪し、聖地を訪ねる。これらの体験がもたらす意味については、また稿を改めなければならない。

## 注

- 1) Eleanor Melville Metcalf, *Herman Melville: Cycle and Epicycle* (Westport: Green Wood Press, Publishers, 1970), p. 110.
- 2) William Harmon, *The Classic Hundred: All-Time Favorite Poems* (New York: Columbia U.P., 1990), p.181.

- 3) Ralph Waldo Emerson, "The American Scholar," *Nature, Addresses and Lectures* (New York: AMS Press, 1979), p.115.
- 4) Hershel Parker, *Herman Melville: A Biography, Volume I, 1819-1851* (Baltimore: Johns Hopkins U.P. , 1996), p. 119.
- 5) Herman Melville, "Fragments from a Writing Desk," *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*, ed. Harrison Hayford, Hershel Parker, G. Thomas Tanselle (Chicago: Northwestern U.P. and Newberry Library. 1987), pp. 191-2.

#### 参考文献

- Allen, Gay Wilson. *The Solitary Singer: A Critical Biography of Walt Whitman*. Chicago: The University of Chicago Press, 1985.
- Howard, Leon, *Herman Melville: A Biography*. Brekeley: U. of California P, 1967.
- Miller, Edwin Haviland. *Herman Melville*. New York: George Braziller, Inc., 1975.
- Parker, Hershel. *Herman Melville: A Biography, Volume I, 1819-1851*. Baltimore: Johns Hopkins U.P. , 1996.
- Robertson-Lorant, Laurie. *Melville: A Biography*. New York: Clarkson N. Potter, Inc., 1996.
- Turner, Arlin. *Nathaniel Hawthorne: A Biography*. Oxford: Oxford U.P. , 1980.

(岩手大学教育学部英語教育講座)